



## ■8月16日(月) 東京高校初日

8月9-10日の中学校教員のための経済教室に引き続き、8月16-17日には高校教員のための経済教室が、東証グループと経済教育ネットワークの主催で、東京の東証ホールで開催された。

1日目(16日)は、司会の新井明講師(小石川中等教育学校・上智大)、および主催者側から東証グループの代表と経済教育ネットワークからは篠原総一教授(同志社大)による挨拶で開会された。

まずセッション1では、中川雅之教授(日大)が「教科書で考える財政の仕組み」というテーマで講演し、財政の経済学の重要な問題を、単に教科書に沿うだけではなく、現実の政府の支出や税収などの問題や数字を使って説明を行った。そのような数字は、財務省のホームページなどウェブ上で容易に見つけることができることも指摘された。特に強調されたのは、政権交代の財政支出への影響、増加し続ける政府債務残高、減少する乗数効果、日本の財政破綻の可能性などの問題であった。

次のセッション2では、大竹文雄教授(大阪大)が「教科書で教える市場経済の考え方」というテーマでプレゼンを行い、まず経済学の見方・考え方として、合理的選択行動が完全競争のもとで効率性をもたらすこと、また効率性の問題と所得分配の問題とを明確に分ける必要があることが指摘された。

次に、よくある疑問として、なぜ供給曲線が右上がりなのか、同じ財なのに店によって価格が違う場合があるのはなぜか、といった問題を取り上げた。さらに、労働市場において、競争的な場合と買手独占的な場合で、最低賃金制が好ましい経済効果を上げるかどうか議論された。そして最後に、市場の失敗のケースを説明するとともに、政府の失敗も同時に考える必要性が指摘された。

それに続くセッション3では、榊原宏司氏(東証グループ CSR 推進部)が、「教科書で教える金融・証券の仕組み」と題する講演を行い、金融および証券市場の仕組みについてミクロとマクロ両面から詳しい説明を行った。

(文責：宮尾尊弘、宮尾 blog より引用)

宮尾尊弘先生のレポート参照

16日の記事：<http://miyao-blog.blog.so-net.ne.jp/2010-08-16>



## ■ 8月17日(火) 東京

熱帯のような暑さの東京（猛暑日37度）での二日目。87名の先生方の参加で実施された。

### 第1講義 篠原代表「高校教科書で教える国際金融の仕組み」

国際経済の教科書の記述は問題。ストーリー性とメッセージが浮かび上がらない。リカードに関するエピソードから始まる。

講義の内容は4つ。

一つは、比較生産費説のかんどころ。

二番目は、国際収支表の読み方。マンデル教授の発想を篠原教授が読み解いたもの。特に、外貨準備の箇所がミソ。中央銀行の貨幣保有高になるが、変動相場制と固定相場制（金本位制）では、その後の貨幣供給や政策が異なることを説明。

ここから、三番目の柱となる為替レートの決め方を解説。その際、為替レートの本質的意味を問うている、北京の大学入学試験の問題を紹介しながら、しっかりした理解を求めることが大切と強調。ポイントは、現在の利子率と将来のレートの予想であり、それ以外の、ファンダメンタルや需給曲線のシフトなどでの説明は、意味がないと指摘。

四番目は、金本位制とIMF体制の問題の解説。

教科書記述の問題点と、国際経済、金融を理解するための基本的な経済の考え方を指摘、解説した講義であった。

### 第2講義 野間先生担当「大学入試問題解説」

札幌、大阪に次いで三回目の講義。それぞれ担当者が違い、個性的な解説となった。

野間先生も、入試プロジェクトから派生した大学入試問題の解説を、あらかじめ準備をした入試問題集と解説集をもとに展開。

余剰分析、外部不経済の内部化、貿易の部分均衡分析、国民所得計算、ローレンツ曲線とジニ係数に関連する問題を、その背景にどんな経済理論があり、どう理解したらよいかを丁寧に解説する。さらに、入試問題から見えてくる現実の経済問題（食糧制度、米農家への個別保障問題など）にも言及。

併せて、関連問題で、オープンマーケットオペレーション、コール市場、コールレートと公定歩合の関係など、先生方が理解しにくい事項に関して、質問に答えながら解説を加えた。

参加した先生方からは、これまでどう生徒に説明したらよいか疑問に思っていたところが解説され、ありがたかったとの声が寄せられていた。



### 第3講義 Gディスカッション

途中帰宅の先生を除き、約 50 名の先生方が 2 グループに分かれて、アドバイザーを加えて実施。最後に、まとめの報告で情報を共有した。

出された実践事例では、新聞を読ませる工夫の一環としてスピーチをやらせている、中学校の教科書を読んでみるのが大事なのではないか、講義プラス体験をどう平常の授業で組み立ててゆくか実験中とか、そのなかで折り紙の自動車を作らせて分業や生産性の向上を実感させているという報告もあった。

質問や疑問では、スピーチで経済に関連するものを発表する生徒が少ないのでそれを増やすには？教科書を最後まで終わらせるには？ 地元の教材開発を個人や団体でやるには？ そのような情報にアクセスするには？ ゲームなど一過性の教材はおもしろがるがそれを深めるにはどうすれば？ 公共財の事例はどんなものがよいか？などが出され、それぞれアドバイザーからの回答がなされた。

この種のグループディスカッションははじめての試みであったが、参加された先生方は自分だけの悩みや疑問が共通のものであることを確認、また、先生方の実践のなかからヒントを得ることもできたようだ。さらに、講師の先生方と膝をつきあわせて、質問や対話ができるなど、パネルディスカッションとは又異なる有意義な時間となったことと思われる。

文責：新井 明